

評価項目 1	（ア）体系的な履修を促す科目編成となっているか （イ）開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・科目群別非常勤比率（3カ年程度） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）食物栄養学科は管理栄養士・栄養士養成施設であるため、栄養士法施行規則第 11 条で定められた教育内容を提供する必要がある、それに基づく体系的な履修を促す科目編成になっている。

（イ）管理栄養士学校指定規則に従い単位数として最低 82 単位の科目設定がされている。科目群別非常勤比率（3カ年程度）を確認すると、80%以上の割合で専任教員が担当している。これまで、栄養士法施行規則により、ほとんどの科目で 1 クラス 40 人の 3 クラス制で授業を行っていたが、2020 年から基礎系の講義について 1 クラス 60 人の授業ができるのではないかと判断し、2 クラス制を導入した。2021 年以降も続けている。実験・実習科目については 1 クラス 40 人の決まりがあるため現行通りである。

【成果が上がっている点】

（ア）学生の履修に関連する満足度・修得度（卒業時アンケート結果 2021）の結果から、満足度は、「目指す資格が取得できる」、「最先端の研究」の項目が高く、また、修得度は、「大学の専門科目で学んだ知識・技能」、「専門知識や技能を活かして地域に貢献する能力」の項目が比較的高いあるいは高い、よって、一定の満足度や学科として特に重点を置いている管理栄養士関連の能力が身につけていることが伺える。また、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの関連について、カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック）を確認すると、ディプロマ・ポリシーの各項目がカリキュラムに配置されており、体系的な科目編成となっている。

（イ）学生の履修に関連する満足度・修得度（卒業時アンケート結果 2021）の結果から、満足度は「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業の多さ」、「実習の内容・数」の項目が高く、このことから、一定の満足度を確認することができ、開講科目数の適切性を確認することができる。

【課題となっている点】

（ア）体系的な履修を促す科目編成であることは確認できたが、学生の履修に関連する満足度（卒業時アンケート結果 2021）の結果から、満足度は、「幅広い知識・教養が身につけられる授業の多さ」、「国際感覚が身につく授業の多さ」、「語学力が向上する授業・制度」、「自分で考える力が身につく授業の多さ」、「プレゼンテーション能力が身につく授業の多さ」、「討論・参加形式の授業が受けられること」、「地域の人や実際の社会と連携する授業やインターンシップの多さ」、「カリキュラム選択の幅が広い」の項目が低かった。また、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの関連では、ディプロマ・ポリシーの各項目がカリキュラムに配置されているものの、偏りがみられる。学科のカリキュラムでは、外国語の対応が不十分であり、討論・参加形式の授業などに関連性がある必修科目、選択科目はあるが、多くはない。今後、学科の改組などを利用して対応する必要があると考えられる。

（イ）学生の履修に関連する満足度・修得度（卒業時アンケート結果 2021）より、満足度は、「少人数・ゼミ形式授業の内容・数」、「各授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）人数の適切性」の項目が低かった。2020 年度より基礎系の講義科目に 2 クラス制を導入したので、2 クラス制の十分な教育効果の検証作業も含めて、人数の適切性を検討することが今後の課題である。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

アセスメントブックの結果から、修得度が高いディプロマ・ポリシーの項目は、学科の管理栄養士課程を基礎とする教育課程を受けてきた結果と相違はないと考えられる。満足度の高い項目も、学科の管理栄養士課程を基礎とする教育課程を受け、また卒業研究も行った結果と相違はないと考えられる。

汎用的技能としての外国語の対応が不十分であり、社会性・自律性に関連性がある必修科目や選択科目はあるものの、多くはなく、また、自律性は、関連性をやや有する科目があるのみであることが確認された。今後の課題と考えられる。

【成果が上がっている点】

アセスメントブックの結果から見た成果は以下の通りである。

修得度：知識・理解（専門分野について、高度の知識・理解・技能を有している、人文・社会・自然

など広い教養を有している）、汎用的技能（日本語を正確に理解・表現できる）、思考・判断（知識・技能・態度等を総合的に活用し、主体的に課題を発見・解決できる）、社会性・自律性（専門的知識・理解・技能等を活用して、社会に貢献できる）

満足度：教育内容と将来の進路との関連性（1 回生）、大半の授業に関して、その履修人数（1 回生、3 回生）、専門的な知識が身につく授業が多い（卒業時）、将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業が多い（卒業時）、最先端の研究にふれられる（卒業時）、授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）で他人と協力して物事を進める機会が多い（卒業時）

【課題となっている点】

管理栄養士としての倫理観・社会的責務、チーム医療・栄養管理を行う上での専門性を活かした協働・リーダーシップ、管理栄養士としての生涯を通した自律的な学習能力を養う科目が含まれているにもかかわらず、これらの修得度が低い結果となった。管理栄養士としての目標が高すぎる故に学生の意識との間に乖離が生じているのではないかと考えられることから、管理栄養士に限らず、食・栄養・健康に関する専門知識・理解を学んだことが、社会に貢献し、協働およびリーダーシップをとれるもので、生涯を通した自律的な学習能力続けられるよう、自信を持てるような教育を行うことが必要と考えられる。例えば、段階（学年）に応じた修得度のレベルを示しておくのも一つの方法と考えられる。

「母語以外の特定の外国語が運用できる」の項目は修得度が低い結果になった。学科としては、学生のレベルに応じた科学英語の教育ができていないためと考えられ、到達度調査によるクラス分け、それに伴うクラス数を増やすことなどによって、修得度を上げる必要があると考えられる。

「授業の多様性（3 回生）、幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い（卒業時）、自分で考える力が身につく授業が多い（卒業時）など」の満足度が低い結果となった。管理栄養士課程の教育課程は、知識・技能の修得、実験・実習、かつ資格のための必修が多く、選択が少ないことが影響していると考えられるが、資格取得のためのカリキュラムの変更は難しく、今後の学科の改組によって、選択科目を増やすなどして、自由度のあるカリキュラム構成にする必要があると考えられる。

「国際感覚が身につく授業が多い（卒業時）」、「語学力が向上する授業・制度が充実している（卒業時）」の項目は満足度が低い結果になった。上記の修得度の対応と同様に、まず、到達度調査によるクラス分け、それに伴うクラス数を増やすことなどを行い、満足度を上げる必要があると考えられる。

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・ 成績分布（G P A ・ 得点）（科目群別・3 カ年） ・ ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) ALCS 学修行動比較調査 2021 より、提出物に対する教員からの添削やコメントの学習経験は

0.48（1 がたまにあった）と低い。また、授業の成績評価は適正だと感じているの項目が、「科目によってばらつきある」が 47.0%となっている。しかし、学んだ成果に対する評価のされ方の満足度が 1.06（少し満足）のレベルになっており、2020 年の 0.95 より伸びていることから、成績評価やフィードバックの適切な実施状況が増えている。

（イ）成績分布（GPA・得点）（科目群別・2019～2021）より、成績分布に偏りは生じておらず、問題ない状況といえる。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

評価項目 4	（ア） カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 （イ） 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）科目群別非常勤比率（3 カ年程度）を確認すると、80%以上の割合で専任教員が担当しており、2021 は 92.8%の割合である。これは栄養士法施行規則により、医師や管理栄養士有資格者および厚生労働省に承認された（科目適合）教員が担当しなければならない専門科目が多数あるため、専任教員が担当しているためである。

（イ）非常勤講師比率は、2018 年の 16.0%から 2021 年 7.2%と減少し、他の学部学科と比較して最も低い。専門科目の一部は、病院管理栄養士、学校栄養教育、企業の商品開発など実務経験を踏まえた講義内容が必要であるため、該当科目については必要最小限度の非常勤講師が授業を担当している。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

担当部局

食物栄養学科

(イ) 特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

学科では、2020 年度に FD セミナーとして、コロナ禍における学生の心の健康に関して講演を開催した。2021 年度は、障害を持つ学生に対してどのように合理的配慮を実施していくかは大きな課題であったため、「発達障害の傾向を持つ学生の理解と対応」というテーマで、外部講師に講演を依頼した。講演では大学での教育の現場において発達障害の特性に伴いどのような困りごとが生じやすいか、それに対して学生本人がどのような捉え方をしているか、個人レベルから組織レベルまで実際にどのような対応や支援が必要であるかについて先行研究や架空の事例についての解説があった。障害を持つ学生に対する適切な対応に関する知識を身につけるとともに、教員間での意識の統一が図られることが期待された。学科では、今後も引き続き、「学生と教育」に焦点を当てた FD を実施していく予定である。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・ 教員組織編制方針 ・ 専任教員の状況 ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 2021 年 4 月の本学科の教員組織の職位構成は、教授 70.6%(12 名/教員数 17 名；以下同様、男性 6 女性 6)、准教授 17.6%(3/17、男性 2 女性 1)、講師 11.8%(2/17、女性 2) であった。男女比 8:9 である。年齢構成は、60～69 歳 23.5%(4/17)、50～59 歳 47.0%(8/17)、40～49 歳 23.5%(4/17)、30～39 歳 5.9%(1/17) である。2022 年 3 月には教授 1 名（男性）の定年退職があったが、後任は採用していない。バランスに配慮した教員組織編成と考えられる。

(イ) 学科のカリキュラムポリシーを踏まえて、食と健康に関する基礎科目、管理栄養士関連科目の専門基礎分野と専門分野で構成される教育課程・開講科目に対して、食品学、調理学、衛生学、栄養学、臨床栄養学、給食経営管理栄養学、公衆栄養学などを研究分野とする教員を配置しており、担当科目と各研究分野が合致した教員組織となっている。

【成果が上がっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

(ア) 2022 年 3 月には食品系の教授 1 名の定年退職があったが、後任は採用していないため、学科の専任教員数は 17 名より 16 名になった。本学科は定員 120 名の学生全員が国家資格の管理栄養士取得を目指しながら、全学生が卒業研究を実施しており、講義および教員一人当たりの学生指導の負担、すなわち理系特有の実験や調査において学生を個々に直接指導する時間などの負担が増加している。2022 年度は 154 名の入学者があり、さらに負担が増加することから、今後、負担軽減のための対策が必要である。

(イ) 特筆すべき事項なし

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況 ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

学科においては、学部予算額 510 万円に対して、執行（ゲストスピーカー除く）額約 163 万円（執行率 33%）と教育活動予算を十分に活用している。2021 年度の教育活動予算は、学科の継続事業として、

①学生に大学生としての自律を目指してもらうための講演「プロフェッショナルを目指すための意識改革講座－食物栄養学科で有意義な学生生活を送るために」、②管理栄養士国家試験対策としての業者模試受験料援助「国試対策講座」、③国際的な要素を取り入れたイベントの「フランス人講師による地中海食に関する講義と料理実演」、④その他「テーブルマナー講習会（和食）（洋食）」、「1・2・3・4 回生対象の食品工場見学」に予算を活用した。継続性の観点から 2022 年度の教育活動予算も、①～③を継続している。

【成果が上がっている点】

2022 年 3 月卒業者の管理栄養士国家試験合格率は、97.4%(111 人合格/114 人卒業)であり、全国平均の 65.1%より高い合格率を得ている。「国試対策講座」を含め、専門科目等の教育、国家試験直前の補講などの学科の取り組みが効果を上げていると評価できる。

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

家政学部食物栄養学科は、管理栄養士・栄養士養成施設として、120 人の学生に対して講義科目のほか、実験実習が適切に行われている。アンケート結果では、「自分で考える力が身につく授業の多さ」、「プレゼンテーション能力が身につく授業の多さ」、「討論・参加形式の授業が受けられること」など一部の項目で低い評価がみられる。学問領域から考えて難しいと考えられるが、アクティブラーニングや双方向型授業を取り入れることも必要であろうと思われる。2022 年度は 154 人の入学者があったことから、専門性が高まる 3 回生教育、4 回生教育への対応が必要であると考えられる。